



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「インド芸能の世界 with 人間国宝」③

普通の旅行が、親善公演になってしまった。わが輩は単なる案内人ではなく“コーディネーター”になってしまったのである。現地とのやりとりが複雑なものになってきた。

実はその親善公演に先立ち、2月1日から僧侶集団を率いてブッダ生誕の聖地ルンビニーに赴く予定になっていた。その資料作りにも追われていた。この僧侶集団については次号の「因果応報」の話ですとして、とにかくわが輩の頭は“ぼんぼん”になっていた。

それだけではない。東大某教授が3月17日より熊野高野山で研究会を行うにあたって相談を受けたが、いつの間にもやら“ボランティア・コーディネーター”になっていた。

さらにさらに、3月21日某会で「カルマ(業)」の話をするようになっていた。

そのため1月は頭が“ぼんぼん”に加えてパンパンになっていた。

(ああ、脳みそハジケル！)

読者諸氏よ。わが輩の苦勞話を披歴しようではないか。

前述したように、コンセプトは「岡倉天心」である。天心は1902年(明治35)カルカッタに上陸し、ヴィヴェーカーナンダやタゴールと親交を深めている。その後、彼はブッダが悟りを開いたブッダ・ガヤーを訪れている。

悟りを開いた大菩提塔の裏には菩提樹がある。そこでの奉納演奏許可を管理委員会に前もって願い出たが、全く梨のつぶて。返事がないのは暗黙のOKだとわが輩は勝手に解釈した。だが、印度山日本寺での奉納演奏では事前許可を取る必要がある。昨年東大寺の長老が日本寺の竺主に就任した。そこで東大寺に出かけて行き許可を頂いた。

次の王舎城の多宝山宝塔のご住職は旧知の仲、快く許可を頂いた。

(ここまでは楽勝だ)

そうこうするうちに領事館から連絡が入った。

「折角来られるのなら、ウチでもやりませんか」

わが輩は外交官アレルギーがある。もう昔のことだが公使から言われた。

「インドに来る旅行者は精神鑑定をしなきゃ」

(今ならパワハラだよ)

今回加わったT君も苦い思い出がある。初渡印のとき大使館員と接触した。彼が一流企業に就職したとき、食事の誘いがあった。就職祝いかと思いきや、二人の洗脳外交官による宗教勧誘であった。

零細企業なら呼びはかからなかったであろう。長期的メディア戦略の一環である。大ゲンカになって別れた。

(タダ飯食うべからず！わが輩なら食ってから逃げる)

総領事と遣り取りする間に、あることを思い出した。わが輩のボス教授から以前に紹介を受けていた方であった。それをすっかり忘れていた。ボスご推薦の人徳外交官である。読者諸氏よ。人は冠ではなく徳によって知るべきである。信頼は醸成された。すべて総領事にお任せだ。わが輩の苦労は一つ取り除かれた。

人間国宝が主演だが、重要な脇役が加わった。茶の宗匠である。岡倉天心をコンセプトにする限り、宗匠の出現は大歓迎である。天心といえば代表的著作「茶の本」がある。お茶と天心とインドの密接な関係については後述する。

ところでわが輩は茶道については全くの不作法である。醍醐寺の茶会に招かれたが大恥をかいた経験がある。よって茶会の舞台セッティングはわが輩には出来ない。そのうち宗匠と総領事は直接打ち合わせすることになり、わが輩の苦労はまた一つ取り除かれた。

総領事から 250 席収容の会場を確保した、との連絡が入った。

(なんとなく不安。人が集まるのか・・・)

人間国宝との打ち合わせでは、50 名ほどの小規模なものを考えていた。ところが“文化使節団”に発展し想定外の方向へ進みだした。

まだ、ベンガルの大学から連絡が来ない。これも若干心配の種だが、ここに至っては諦観の境地。「成るように成る」のがインド。

わが輩の苦悩は殆ど除去された。しかしながら、まだ笑えない。

今回は使節団の行程を辿ってみたい。出発当日からハプニングだよ。また、本来のコンセプト「岡倉天心」とヴィヴェーカーナンダとタゴールの秘話について語ろうではないか。